

## 夏の訪れ

梅雨が明けると、空は一段と高くなり、強い陽射しが大地を照らし始めます。庭先では朝顔が花を開き、蝉の声が響き渡るころになると、本格的な夏の訪れを感じます。夏は、一年の中でも最も生命の力を感じる季節です。青々と茂る木々、勢いよく流れる雲、夕立のあとの澄んだ空気。目に映る景色はどれも鮮やかで、ほんのひととき立ち止まるだけでも、季節の息づかいが伝わってきます。

俳句を詠むようになってからは、暑さの中にもさまざまな趣を見つけられるようになりました。風鈴の音色に涼を感じ、木陰を渡る風に心を和ませ、夕焼けに染まる空を眺めながら一句を思い浮かべる。日々の暮らしの中に、夏ならではの情景が数多く息づいています。

季語には、花火や向日葵、蛍、夕立、かき氷など、夏を彩る言葉が数多くあります。その一つひとつに、自分だけの思い出や風景を重ねながら詠むことも、俳句の楽しみの一つでしょう。

この章では、そんな夏の光や風、そして季節の移ろいを感じながら詠まれた句をまとめました。ひとつひとつの作品から、それぞれの夏の景色を思い描いていただければ幸いです。